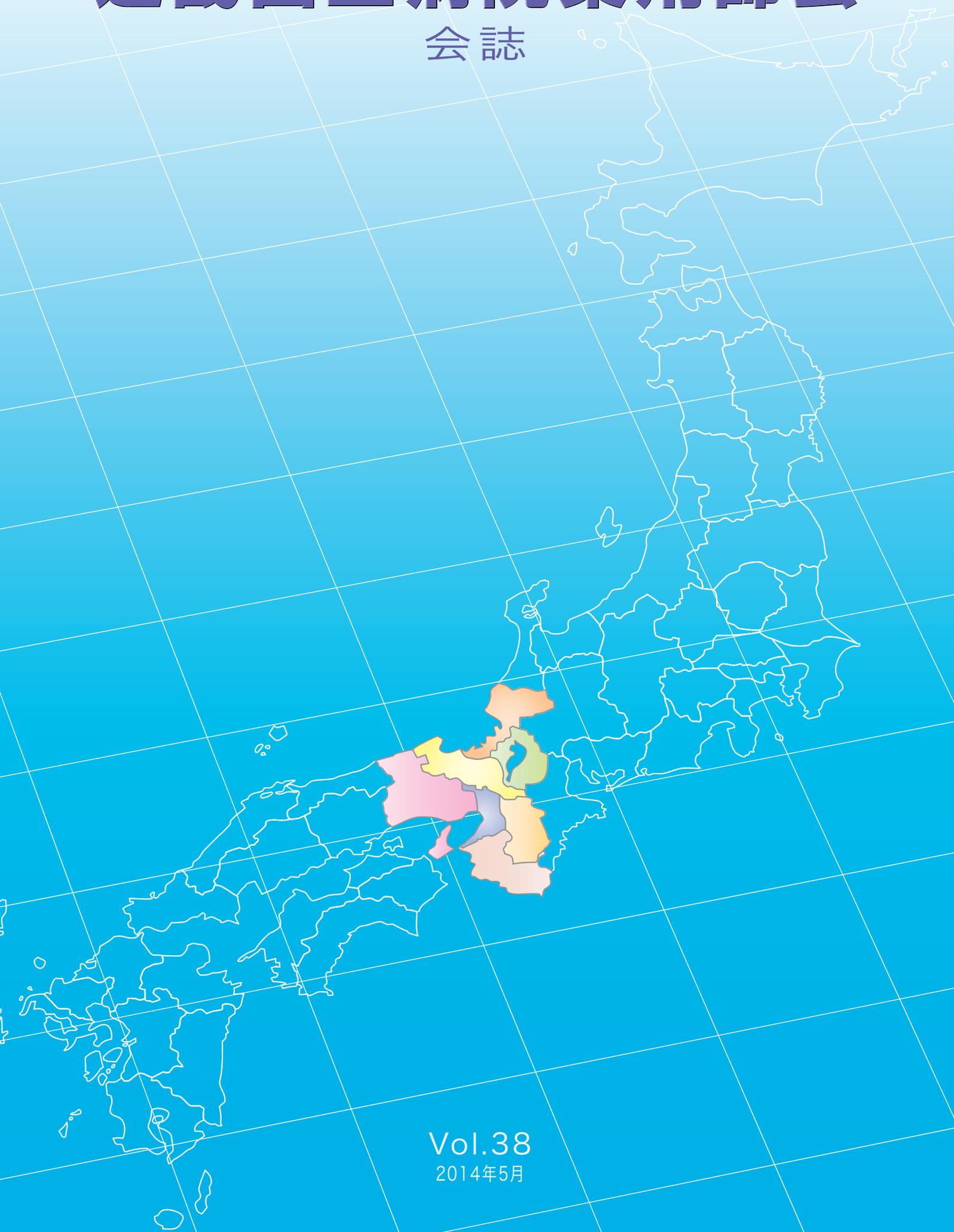


# 近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.38  
2014年5月

## 目 次

|   |    |
|---|----|
| 提言.....   | 3  |
| 兵庫青野原病院 山田 雄久   |    |
| 薬剤科紹介.....  | 5  |
| 大阪医療センター 上野 裕之  |    |
| 平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会学術集会報告.....                                | 10 |
| 東近江総合医療センター 土井 敏行   |    |
| 平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会学術集会 特別講演会報告.....                          | 11 |
| 舞鶴医療センター 古川 哲也  |    |
| 平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師会教育研修委員会主催<br>実務実習合同発表会 pilot study 報告..... | 13 |
| 宇多野病院 鈴木 晴久   |    |
| 平成 26 年度 新採用職員研修を受講して.....                                    | 15 |
| 大阪南医療センター 長谷川 愛里  |    |
| 平成 26 年度 新採用コメディカル部門研修会に参加して.....                             | 17 |
| 刀根山病院 山田 咲季   |    |
| 「ASCO-GI 2014 (Gastrointestinal Symposium 2014) 」に参加して.....   | 18 |
| 大阪医療センター 槇原 克也  |    |
| 「日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2014」に参加して.....                                | 21 |
| 大阪医療センター 藤田 晃介  |    |
| 「第 35 回日本病院薬剤師会近畿学術大会」に参加して.....                              | 22 |
| 大阪南医療センター 田中 亮  |    |
| 「第 29 回日本静脈経腸栄養学会」に参加して.....                                  | 23 |
| 大阪南医療センター 西澤 有紀   |    |

|                         |        |
|-------------------------|--------|
| 病院薬剤師になって.....          | 25     |
| 近畿中央胸部疾患センター            | 田川 知津子 |
| 大阪南医療センター               | 藤原 佐知子 |
| 院内リフレッシュ研修に参加して.....    | 27     |
| 南和歌山医療センター              | 藤本 亜弓  |
| 趣味のページ～南国の海に魅せられて～..... | 28     |
| 姫路医療センター                | 金川 明裕  |
| 編集後記.....               | 29     |

提言  
～趣味から自己啓発～

兵庫青野原病院 山田雄久

今年2月ソチオリンピックが開催され、日本は計8個のメダルを獲得しました。その中には唯一金メダルとなったフィギアスケートの羽生結弦選手がいます。元来、あまりスポーツを隈なく、視聴しない私ではありますが、ショートプログラムでの華麗な演技中に流れてくる哀愁漂う曲に懐かしさを覚えました。ブルースギタリスト Gary Moore の「パリの散歩道」ではないですか。男子ショートプログラムのこの日は彼の命日でもあり、余計に感慨深い思いでした。たしか CD はすでに廃盤となっていたはずで、なぜ十九歳の羽生選手が知っているのだろうか。詳細は不明ですが、オリンピック後、羽生選手ファンからのつぶやき効果で、CD が再発されるとのことです。さて Gary Moore は 2010 年に 20 数年ぶりに再来日を果たしましたが、私はその公演を鑑賞する機会を逸してしまい、その後、彼は 1 年もたたず他界してしまいました。今もって鑑賞できなかつたことが、心残りです。今までの話の流れからお察しの通り、私の趣味といえば洋楽およびライブ鑑賞となります。Gary Moore には心を揺るがす楽曲が、数多くあるのですが、こと記憶に残る語録、エピソードとなると特に思い浮かびません。しかし、ミュージシャンの中には言葉は単純で乱暴ですが、生きざまを感じる語録・エピソードを残しています。

永らく勤務していると新規業務の展開、環境変化への対応などピンチがあります。その際にはきっかけとして『自己啓発』に関する書物を幾度かは挑戦してみようのですが、どうも勝手が違い、しっくりいきません。むしろ長年の付き合いである彼らの楽曲、語録およびエピソードの方が、説得力に勝り、勇気づけられてきました。幾つか彼らの語録を紹介します。「変わり続けるからこそ、変わらずに生きてきた。」(Neil Young) 「三十過ぎたら車のバックミラーは外すつもりだ。過去には用がない。」(Van Halen) 「いずれ誰でも年を取る。髪は薄くなり、頬は弛み、腹は出る。だから今やるしか無い。」(Anvil) 「道草が無ければ、進歩はありえなかった。」(Aerosmith) 等。回顧すると洋楽は 70 年代～80 年代一纏めにロックと呼称されていましたが、今では、ジャンルも細分化され、特化したリスナーが存在することで洋楽界が成り立っています。一方、その時代の病院薬剤師は、調剤業務が主業務であり、今でいうところの病棟業務・DI 業務のデスクワークは一部の心無いスタッフからは快く思われない不遇の時代でもありました。昨今では先輩方の功績により、様々の業務を薬剤業務と認識されて、デスクワークの時間を確保できるようになりましたが、その時間に相当するリスナー(患者・社会)のニーズも広範囲で専門性の高い知識・技能が要求されています。

この4月には「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」(Ver. 2.0) 厚生労働省医政局長通知(医政発 0430 第1号)が発出されて、その解釈と実践事例が示されています。通知に記載された業務内容の具体例は現状では対応不十分な箇所も多いものです。さらに6月には薬剤師法第二十五条の二が改正となり、従来、医薬品の適正使用のための必要な医薬品情報が、提供に留まっていたことが、指導にあたるのが義務付けられます。このように社会が薬剤師に

求めるハードルが更に高いものとなっています。この難局、一旦張り詰めた糸を緩めて趣味からヒントを得ることで、自己の持つ能力や意識の成長に繋げてみては如何でしょうか。



## 薬剤科紹介



### 【概況】

大阪医療センターは、大阪城を間近に見ることができ、市の中心部を南北に走る上町台地の北端、難波宮跡に隣接する地に位置する。この地は明治初期に緒方洪庵の次男緒方悱順惟準が活躍した大坂病院があり、適塾の教えである「扶氏医戒之略」を要約した“正しく、品よく、心をこめて”の3つの言葉が職員に向けたモットーとなっている。

標榜診療科は39科で高度総合医療施設として国が提供する「政策医療」を行うべく、努めている。また、三大疾患であるがん・心臓病・脳卒中をはじめ、HIVや肝炎などの感染症、高度救命救急医療・災害医療等に幅広く取り組んでいる。

薬剤科は40名の薬剤師が在籍し、医療安全の向上と経済的な効率を勘案し、医師、看護師および多職種との協働を図りながら主体的に薬物療法に参画することで、医薬品の適正使用推進に日々努力している。

平成18年からリスクマネジメントを目的として、病棟における薬剤師業務として1フロ

アに 1 名の常駐薬剤師が配属され注射薬調製、持参薬チェック等を実施してきた。そのこともあり、平成 24 年 4 月から病棟薬剤業務実施加算の新設に逸早く対応できた。病棟専任薬剤師は、持参薬の確認、TDM、副作用のモニタリング、相談応需、医薬品に係る医療安全の確保、医薬品の適正管理等において奮闘しているところである。

### 【薬剤科業務について】

薬剤科では、平成 26 年度の目標を「薬剤師による診療への貢献 ー入院から退院までの一連の薬学的ケアの実施 ー」とし、入院中の薬物療法の適正化と在宅療養での質の維持を目指し、持参薬から退院薬まで一連して関与する計画である。

#### 1. 病棟薬剤業務

病棟専任薬剤師は、回診・カンファレンスにおいて各種情報（検査データ、投与中止、重複処方、投与量の変更確認、開始時間の確認）を収集する。注射薬を調製する薬剤師は、溶解時の安定性や配合変化をチェックした上で、これら収集された患者情報と医薬品情報をうまく連携させ、病棟内のクリーンベンチで月間 5,000 本程の一般注射薬の無菌調製を行っている。また、初回面談では、持参薬、OTC の服薬状況、サプリメント等の摂取量、アレルギー及び副作用の既往歴について、医師、看護師等の多職種へきめ細かな情報提供を行い薬剤師目線による問題点の洗出しやコンプライアンス及び処方の評価を積極的に行っている。また、薬物療法を的確に行う上で薬学的関与が重要なハイケアユニット患者やハイリスク薬服用患者に対し薬物動態を勘案した投与設計や投与経路・速度の提案、副作用症状の早期発見等を目標として積極的な関与を実施している。

#### 2. 抗癌薬・TPN 製剤の無菌調製

良質な医薬品の供給を目的に、薬剤科注射薬室の無菌室において一元的に、クリーンベンチ・安全キャビネットを用いた無菌混合調製を実施している。

抗癌薬に関しては平成 14 年 7 月に外来化学療法室が開設され、全診療科の外来患者を対象に月間 1,100 本の無菌調製を行っている。また入院患者に対しては、平成 17 年度より取り組みを始めており、月間 1,617 本の調製を行っている。また、がん薬物療法委員会において承認されたプロトコールによって、薬剤科でプロトコールチェックを行い安全管理の徹底を図っている。平成 23 年度 4 月から、外来化学療法室において、薬剤師が常駐し、患者への抗癌薬の服薬指導を実施している。

#### 3. 医薬品情報管理（収集・整理・評価・提供）

医薬品情報室では最新の医薬品情報の収集及び発信を行うために専任スタッフを配置している。また、病棟専任薬剤師と連携を図り、日々更新される医薬品情報を迅速かつ的確に医療従事者に報告するとともにプレアボイド事例、副作用及び有害事象の収集、医薬品・医療機器副作用の報告、医薬品副作用被害救済制度への支援を積極的に行っている。

#### 4. 治験薬管理業務

治験薬管理者（薬剤科長）の管理責任の下、GCP を遵守した治験薬の適切な保管、管理、調剤を行うと共に、注射薬の無菌調製など、被験者への治験薬投与が円滑かつ安全に行われるよう努めている。更には、受託研究審査委員会委員として院内における治験・臨床研究の適切な実施の推進に協力している。

#### 5. チーム医療

##### 1) HIV チーム薬剤師



HIV 感染症患者への服薬支援を強化するため、担当薬剤師 3 名（専従 2 名、兼任 1 名）を配置することで円滑な服薬支援体制を構築している。また、平成 21 年 4 月より感染症科外来に隣接した「お薬の相談室」を設置し、薬剤師が常駐することで患者動線の改善、医師・看護師との緊密な連携が強化でき、平成 25 年 10 月末より毎週 1 回のカンファレンスを開始しチームとしての

情報の共有化も実践している。また、新たな活動として後天性免疫不全症候群の患者を対象とした、緩和ケアチーム（PWA: (people with AIDS) サポートチーム）にも参画するなど、多くの長期患者に対しての極め細やかなフォローを実施している。

##### 2) 感染制御チーム (ICT) 薬剤師

当院の ICT は、薬剤師 2 名体制で業務を行っている。

主な業務としては、院内サーベイランス、バンコマイシンなどの抗菌薬に関する血中濃度解析業務などである。当院での特徴的な業務は、院内サーベイランスのうち、カルバペネム系抗菌薬、タゾバクタム/ピペラシリン合剤に関して、全症例モニタリングを実施しており、医師と協働で不適切使用症例などへの介入を行っている（薬剤師は長期使用症例へのカルテ介入も行っている）。

この他にも、血液培養陽性症例への早期介入など、主に医師との協働で業務を行い、患者へ適切な治療が早期になされることを心掛けている。



### 3) 救命救急チーム・災害医療対策本部 (DMAT 薬剤師)



#### 【救命救急チーム】

当院の救命救急センターは 3 次救急医療の一翼を担っており、外傷、熱傷、院外心肺停止、急性中毒など重症救急患者を診療している。チームで支える救急医療の中で薬剤師は、入院前薬歴確認、投与设计、ルート管理など薬物療法支援を行うことで救急医療を支えている。

#### 【災害医療対策部】

平成 25 年 10 月より、当院に災害医療対策部が設置され、薬剤師もその主要なメンバーとして参画している。災害医療は単一の職種だけでは対応が難しく、医師、看護師、事務、薬剤師や診療放射線技師などのメディカルスタッフが協力して対応する必要がある。日々、会議や訓練参加、研修計画を通じて信頼関係を構築している。

### 4) がん薬物療法チーム・がんサポートチーム薬剤師

#### 【がん薬物療法チーム】

当院では外来化学療法室に薬剤師が常駐し、病棟での化学療法と同様に治療法の説明や薬学的ケアの実践を行っている。また、週に 1 回主要な医師やがん化学療法認定看護師と共にカンファレンスを開き、症例のディスカッションを行っている。これまでの取り組みをさらに拡大し、6 月から「がん患者指導管理料 3」の算定を開始する予定である。



#### 【がんサポートチーム】

がんサポートチームは、医師 (内科医、精神科医)、看護師、薬剤師、栄養士、心理士、MSW で構成されており、がん患者さんとそのご家族にかかわって支援活動を行う緩和ケアチームである。主に疼痛緩和、身体症状緩和、精神症状緩和、薬剤の選択・薬剤量の調整、家族サポート、療養場所の調整などを行っている。疼痛コントロール不良な患者さんや状態の悪い患者さんなどは毎日回診を行い、毎日観察、薬剤調整をしている。薬剤師は、薬剤の選択、量の調整、支持療法などの提示などの役割を担っている。また皆で情報を共有するために、火曜日にカンファレンス、木曜日に全体回診、各病棟でのカンファレンスに参加している。

## 5) NST 薬剤師

NST は、嚥下困難などの患者を対象とする嚥下・内科チームとがん患者を対象とするがん・外科系チームの2チーム体制となっている。この体制によって栄養不良に繋がる症例により早期から係わることができ栄養の改善と在院日数の短縮を目標としている。薬剤師は、摂食に影響する薬剤情報の提供や経腸・輸液処方の提案において栄養素や電解質のバランスを考慮し栄養改善に努めている



## 6. 専門・認定薬剤師の育成・研修受入体制の推進

日本病院薬剤会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修施設、日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設、日本病院薬剤師会小児薬物療法認定薬剤師研修施設の認定を受けている。薬剤師新人教育として、薬剤科基幹業務である調剤業務、製剤業務、調製業務、医薬品情報室業務、医薬品管理業務の取得、臨床業務の基礎である体内循環、感染症薬物療法、栄養薬物療法の習得に努めている。同時に、専門・認定薬剤師の計画的な育成のためのプログラムを作成中である。また、薬学生長期実務実習生は4期32名を受け入れた。

今後とも、病院薬剤師の将来像を科員で共有し、薬剤科業務の進展に努めるとともに、患者が安心して治療に専念できる診療体制の構築に寄与して行きたいと考えている。

(文責 上野 裕之)

## 平成 26 年度 学術集会報告

東近江総合医療センター 土井 敏行

平成 26 年 3 月 8 日（土）、大阪 YMCA 国際文化センターにて教育研修委員会主催の学術集会ならびに講演会が、会員 149 名の参加のもと開催されました。また、今年からは学術集会賞（最優秀賞・優秀賞・新人賞）を制定し、受賞者には記念品が贈呈されました（受賞演題：☆最優秀賞、◎優秀賞、○新人賞）。

### 学術集会演題

1. CKD 患者に対するアロプリノールからフェブキソスタット切り替え症例での有効性および安全性に関する検討  
大阪医療センター 木原 理絵
2. ラモトリギンの適正使用への薬学的介入  
やまと精神医療センター 黒田 友則
3. ○外来における高用量医療用麻薬の安全な管理 ～PCT 薬剤師の視点より～  
近畿中央胸部疾患センター 小川 智子
4. 京都医療センターにおける糖尿病薬の投薬後検査実施遵守に係る調査について  
京都医療センター 植田 裕美
5. 当院での経口抗凝固薬エドキサバンの Hb 値に着目した副作用調査  
大阪南医療センター 田中 亮
6. 薬剤師による医師の業務負担軽減への取り組み  
神戸医療センター 中内 崇夫
7. 手術室常駐薬剤師による医薬品の適正管理と麻酔科医の業務負担軽減への取り組み  
神戸医療センター 澤田 浩之
8. ◎抗がん剤処方オーダーに基づいた抗がん剤監査支援システムの開発および有用性  
大阪南医療センター 南野 優子
9. 姫路医療センターでの副作用報告の現状と今後について  
姫路医療センター 濱上 賀正
10. 薬剤師の病棟配置前後におけるプレアボイドの比較  
神戸医療センター 八瀬 恵理子
11. ☆ポリ塩化ビニル製点滴ラインに対するニカルジピンの吸着に関する検討  
国立循環器病研究センター 小原 直紘

## 平成 26 年度 近畿国立病院薬剤師学術集会 特別講演会報告

舞鶴医療センター 古川 哲也

日時：平成 26 年 3 月 8 日(土) 16 時 30 分～18 時

場所：大阪 YMCA 国際文化センター

参加人数：近畿国立病院薬剤師会 会員 149 名

演題：平成 26 年度診療報酬改定と病院薬剤師の方向性

座長：神戸医療センター 関本 裕美 先生

講師：浜松医科大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長 川上 純一 先生

要旨：ご存知の通り、川上純一先生は教授・薬剤部長職を始めとして様々な分野においてご活躍であり、診療報酬に係る各種専門組織委員等としても重要な役割を果たしておられる。

今回は診療報酬改定と病院薬剤師の方向性について、前半は若い世代の参加者も多いという事もあり診療報酬改定の基礎的な事から、後半は病棟薬剤業務管理加算取得の普及等に向けて薬剤師の方向性についてデータ、アンケートを交え DPC に関することも含めご教示頂いた。

診療報酬改定は内閣による予算編成過程を通じ、社会保障審議会医療保険部会・医療部会により策定された「基本方針」に基づき、中央社会保険医療協議会によって審議され実施される。

それは年度毎の傾向を引き継ぐ事が多く、26 年度の改定も前回の診療と介護の連携という流れを引き継いでいる傾向にある。平成 26 年度診療報酬改定では、「入院・外来医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等の取り組み、医療提供体制の再構築、地域包括ケアシステムの構築を図る」を基本認識とし、その中でも入院・外来医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実等の取り組みをポイントに重要課題として位置付けている。将来に向けた課題として、今回の改定以降も平成 37 年に向けて医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実に取り組んでいく必要があるとされ、団塊の世代が 75 歳を迎えるまでに、介護が不足している状況から地域に密着した医療体制を整えていく事が目標に掲げられている。

病棟薬剤業務管理加算に関するアンケートの結果によると、薬剤師の病棟業務は、医師の負担軽減、医療安全管理の視点からみても医療の質が上がっているという結果が多く、高評価となっている。それと同時に職種により薬剤師に求める業務、満足を与える業務は違っている事も明確になってきており病棟薬剤業務として何を成すべきかを再考せねばならない。薬剤病棟業務では、薬学的に薬剤師の専門性を生かした関わり合いが重要であり、行った薬物療法に直接かかわる行為はできる限り診療記録に記載する事が重要である。

現在、病棟業務管理加算を取得している施設は 2 割程度となっている。今後、病院薬剤師として、病棟業務管理加算を取得している事が良い病院であるのでは無く、加算を取得できる体制を整え、患者の薬物治療に向かっていく姿勢を持つ事、病棟薬剤業務の普及、また療養、精神病棟でも病棟薬剤業務は必要であると認めさせる事が薬剤師の価値向上、

職能の幅を広げていく事に繋がると考える。

講演会後の質疑応答は(Q1)加算を取れない病棟にも薬剤師を配置しておくべきか。(A1)配置すべき。病棟薬剤業務は先輩薬剤師達の成果の賜物である。加算ありきではなく、病棟業務は薬剤師の本質的、普遍的業務と捉えるべき。(Q2)TPNは病棟薬剤業務にあたるか。(A2)薬学的な管理、関わりがその業務にあれば加算対象と考える。TPNは混ぜるだけでは対象にならないと考える。自施設では抗がん剤調製時間も入れていない。等活発に行われた。

また、講演会の前に開催された学術集会における発表に触れられて、研究は査読のついた論文にしてその研究がエビデンスとして認知されることが重要である旨話された。



平成26年度 近畿国立病院薬剤師会教育研修委員会主催  
実務実習合同発表会 pilot study 報告

宇多野病院 鈴木 晴久

実務実習合同発表会が、下記の内容で開催されました。今回は **pilot study** ということで、第1部で、5施設合同で計11名の学生が、自己紹介と施設発表を行い、第2部の医薬品の採用・削除についてのワークショップでは活発なSGDが行われました。また、総合討論では、大学教官から非常に有意義な合同発表会であったと、高評価を頂きました。

日時:平成26年3月15日(土)13:00~16:10

場所:薬業年金会館4階 402号室

参加人数:40名

内訳;実習生11名、研修生(SGDのみ参加)2名、見学学生5名(立命館5回生2名、4回生3名)

大学教官:7名(摂南、神戸薬科、京薬、神戸学院、立命館)

スタッフ・役員:教育部スタッフ8名、役員3名、指導担当者4名



内容:

\*総合司会進行:坂本 泰一(近畿胸部疾患センター 副薬剤科長)

1. 開催挨拶: 会長 山崎 邦夫(大阪南医療センター 薬剤科長) (13:00~13:05)
2. 委員紹介 (13:05~13:10)
3. 実習生自己紹介および施設発表(13:10~14:05) 5分×11名 (スライド5-6枚)

京都医療センター

立命館大学 大田 和季

立命館大学 岡本 健太

武庫川女子大学 岩淵 絵里

宇多野病院

京都薬科大学 小西 一誠

大阪南医療センター

摂南大学 高山 裕

神戸医療センター

京都薬科大学 伊東 和剛

|          |        |
|----------|--------|
| 京都薬科大学   | 山本 剛士  |
| 神戸学院大学   | 藤澤 美深  |
| 神戸薬科大学   | 三枝 美緒  |
| 奈良医療センター |        |
| 立命館大学    | 溝口 吏恵子 |
| 京都薬科大学   | 吉田 茉以  |

4. 休憩(14:05～14:20)

5. ワークショップ(14:20～15:40)

テーマ：模擬薬剤委員会による医薬品の採用、削除の検討

WS 進行：鈴木晴久（宇多野病院 副薬剤科長）

\*全体セッション (Plenary Session) 10分

講義 「医薬品の採用削除について」

「Product の発表について」

講師：河合 実（大阪医療センター 薬務主任）

\*グループセッション (Group Session) 50分：討論30分スライド作成20分

2グループ（1グループ6～7名）

課題1 糖尿病治療におけるDPP4阻害薬の新規採用について

課題2 喘息治療における吸入薬の新規採用について

\*全体セッション (Plenary Session) 20分

各課題の審査結果発表5分（スライド5枚）

総合討論 10分

6. 総評：教育研修委員会委員長 関本 裕美（神戸医療センター 副薬剤科長）

(15:40～15:45)

7. 講評：大学指導教官の先生方(15:45～16:05)

8. 閉会挨拶： 副会長 本田 芳久（奈良医療センター 薬剤科長） (16:05～16:10)

## 平成 26 年度 新採用職員研修を受講して

大阪南医療センター 長谷川 愛里

4 月 9 日から 11 日にかけて大阪医療センターで行われた新採用職員研修に参加したので報告させていただきます。研修の目的のひとつとして同期生等が一堂に会することにより、職員間の交流を広げることとあり、参加者は 90 名を超えてとても大規模なものでした。研修は部門別研修が 1 日間、全体での集合研修が 2 日間ありました。

部門別研修では、薬剤師を取り巻く環境と医療の動向、新人薬剤師が身につけておくべきスキル、また、チーム医療についての講義を受けました。調剤業務を基本とし、病棟業務など、時代の流れとともに薬剤師に求められることも変化しているということを改めて感じました。午後からは班別に症例検討、医療安全対策についての事例検討を行いました。症例検討では問題点はすぐにいくつか上がったのですが、それに対する解決策を SOAP 形式で時間内にまとめていくことに苦労しましたが、班員で様々な意見を出し合い進めていきました。班ごとに発表を行ったのですが、同じ症例でも班により問題点や、解決策が異なり、とても勉強になりました。また、他の方の意見や知識はとても刺激になりました。医療安全の事例検討ではその事例だけ見るとどうして防ぐことができなかったのだろうと感じたのですが、日々の業務の中では起こりうることなのかもしれないと思いました。常に意識をし、対策を行い、業務を行っていくことが必要であると感じました。

集合研修では、部門ごとに業務内容紹介を行いました。知っているつもりであった職種においても実際には私が知っているよりももっと幅広い業務を行っていたり、全く知らなかった職種についても知ることができ、これからチーム医療を行っていくうえで他職種について知るととても貴重な機会となりました。

班別討議では、私たちの班は薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、栄養士、理学療法士、言語聴覚士、児童指導員からなる 10 名で、チーム医療を効率的に推進するにはという議題について話し合いました。どの職種からも共通して情報共有がしっかりと行われていないということ、他職種について知らないということが挙げられました。情報共有については職種間での情報共有はもちろん、チーム専任のスタッフだけが知っているだけでなく、重要な情報は専任のスタッフが自部門のスタッフにしっかりと伝え、情報共有することでよりよいチーム医療が行えるのではないかと考えました。また、業務紹介で初めて知ることが多かったことから、お互いの業務についてしっかりと理解することで、このことについてはあの職種の方に聞いてみようなど、よりお互いの職能を活かした効率的なチーム医療が行えると考えました。

最終日は、診療部門、看護部門、また、医療従事者に期待することについての講義を受けました。相手の立場になって物事を考えられているのか、しっかりと周りを見られているのか、ということについて改めて考える時間となりました。医療現場で働く者として、これから忙しい中でもこれらのことを心にとめて働いていこうと思いました。

接遇、コミュニケーション研修では、マナーについて考えた後、実際に言葉遣いや話の聞き方についてロールプレイングを行いました。表情、言葉遣い、仕草、どれも少しのことで相手に与える印象が大きく変わってくるということを実感しました。患者様に対してはもちろん、スタッフ同士においても円滑な関係を築いていくためにこれらのマナーは必要不可欠であると感じました。

今回の研修は、病院、職種の異なる多くの同期と意見交換をすることができ、とても得ることの多い、充実した3日間でした。この研修で得たことを活かし、患者様からもスタッフからも信頼される薬剤師になり、医療に貢献できるよう努力していきたいと思えます。

お忙しい中、このような貴重な研修会を開催して下さった先生方および職員方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



## 平成 26 年度 新採用コメディカル部門研修会に参加して

刀根山病院 山田 咲季

4月14日から16日まで開催された新採用者コメディカル部門の研修に参加しました。私の勤めることになった刀根山病院には新採用薬剤師が私一人でしたので、同じ国立病院機構の同時期採用者に会えることや、多職種の人との交流を楽しみにしていました。実際に交流したことで、自分の仕事への意欲やモチベーションの向上へとつながりました。

3日間にわたる研修の初日は、病院薬剤師の職務と心構えについて学びました。グループ研修に参加したことで多くの人の自分とは違った角度からの考え方や意見を知る機会となりました。1つの症例検討を行っても患者さんの検査値で注目するところと、薬の副作用として注意しなければならないと考えているところがそれぞれ異なりました。どれもが、貴重な意見で、自分は、そのすべての注意すべき点に気付くことのできる薬剤師になりたいと思いました。

2日目は、他職種の方々とグループを作り、それぞれの仕事の内容についてプレゼンテーションを行いました。一緒に病院で働く他職種の方々の仕事についての理解を深めることで、今後のかかわり方や患者さんへのアプローチの違いを知ることができました。

理学療法士と作業療法士は患者さんと直接かかわり合い、基本動作の回復のサポートをしたり、マッサージをすることによって、患者さんのリハビリの伴走者となります。また、栄養士はNSTの一員として栄養面からの患者さんの回復のサポートを行います。

それぞれの職種での患者さんとの関わり方の問題点やその対応策について話し合うことで、自分たちの問題点について再度、確認することができました。

コメディカルは患者さんからの認知度が低く、どのような面から患者さんをサポートしているスタッフであるかが医師や看護師に比べて理解が低いと考えます。この点を問題点として挙げたのは、患者さんの感じる不自由や不安を誰に相談すれば最もスムーズに解決することができるのかを知っていただきたいと考えているからです。そのために、私たちがすべきことはより患者さんとかかわる機会を増やすことが大切であると考えました。

これらの問題点を解消したうえで薬剤師は、薬を服用する前後での体調の変化から効果的に薬が作用を示しているかを判断し、副作用の早期発見に努め、チーム医療の一員として患者さんのケアをサポートする必要があります。

3日目は、マナー講座を受講しました。立ち居振る舞いや敬語の使い方などを学びました。専門的な仕事の方を優先に考えがちでしたが、仕事をするうえで大切なことと感じました。

この3日間の研修を受けて、社会人として大切なことや医療人としての心構えを学ぶことができました。また、グループワークや懇親会を通して同期生との関わりを持ち、親睦を深めることができたと思います。

この研修の経験を今後の業務に生かしていきたいと思います。

## ASCO-GI 2014 (Gastrointestinal Symposium 2014) に参加して

大阪医療センター 榎原 克也

近年のがん治療において、薬物療法が急速かつ目覚ましい発展を遂げていることは言うまでもない。がん患者の増加、副作用の少ない新規抗がん剤や分子標的治療薬、支持療法の発達に伴い、がん薬物療法の様々な新しい情報が日々発信され続けているが、今や国際学会の情報は製薬企業の速報誌やインターネット、国内の様々な学会等でも常に入手できる状態にある。米国臨床腫瘍学会 (ASCO: American Society of Clinical Oncology) はがん治療関連の世界最高峰と言われる学会であり、世界のがん治療の情報発信源と考えられている。その情報量はあまりにも膨大かつ多様であり、本会 (Annual meeting) とは別に毎年 1 月に、消化器癌シンポジウム (Gastrointestinal cancer symposium: ASCO-GI) が開催されている。今回、3 度目の ASCO-GI に参加し、発表の機会を得たことや学会を通じて知り得たこと、感じたことについて報告する。

2014 年 1 月 16 日～18 日、アメリカのカリフォルニア州サンフランシスコは例年よりも暖かく、過ごしやすい気候であった。今年は予約していた航空機がまさかの欠航となり、1 日遅れの出発となったが、学会会場である Moscone West Convention Center へは発表当日の午前中には到着し、ポスターを貼ることができた。



**Moscone West Convention Center (学会会場)**

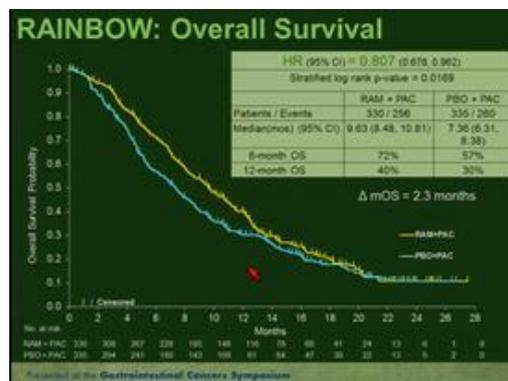
第 1 日目の胃・食道癌のセッションでは、日本人プレゼンターが多く、特に胃癌の領域では世界的に日本の治療が先行していることがうかがえた。胃癌の分子標的治療では、トラスツズマブ以降様々な臨床試験が行われたが、いずれの結果も negative と判定された中、昨年に胃癌の 2 次治療としてプラセボに対して生存率の優越性を示したラムシルマブが、今年は国際共同ランダム化比較試験 (RAINBOW 試験) により、パクリタキセルとの併用による上乗せ効果が示された。サブグループ解析における日本人のデータでも、パクリタキ

セル単独と比較して、パクリタキセルとラムシルマブを併用した方が明らかに生存期間が長いという結果であったことから、日本で発売される日もそう遠くないと思われる。

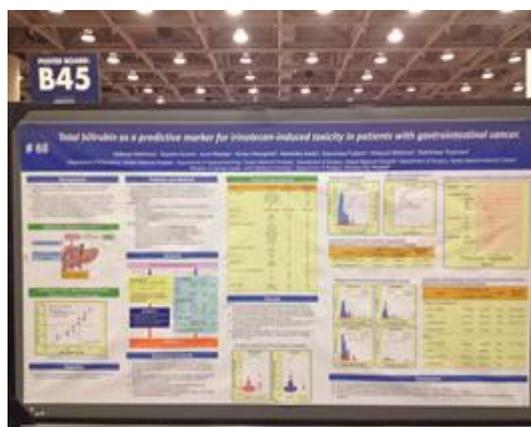
本来、薬の専門家と称される薬剤師よりも、がん薬物療法を専門とする医師が先にこの情報を知り得ているという現実は、やはり国際学会に目を向けていることにあると思う。

2日目の肝・胆・膵のセッションでは薬物治療においてセンセーショナルな話題こそなかったものの、膵がんで最強のレジメンと考えられている FOLFIRINOX の毒性を制御するための用量調整法と治療効果の検証を行った研究がいくつ

か見られ、やはりこのレジメンは欧米においても毒性の強さが課題となっていることが感じられた。3日目の結腸・直腸癌のセッションでは、抗 EGFR 薬の使用においてこれまで KRAS 遺伝子が注目されてきたが、KRAS だけではなく NRAS も含めた全ての RAS 遺伝子で野生型である患者の治療効果が高いことが、様々な臨床試験で確認されていた。このことから今後、がん薬物治療における個別化治療の指針が少し変化していくことも予想される。



### RAINBOW 試験



発表演題



Oral session

さて、国際学会に参加することで、例年様々な刺激を受け感じることもある。分子標的薬の開発が進み、これまで殺細胞性抗がん剤を中心として行われてきた薬物療法の概念は一変した。単剤でも有効性の高い薬剤や特異的かつ様々な副作用をもつ薬剤も登場し、高血圧症や高血糖、血栓塞栓症、皮膚症状、免疫抑制作用、不整脈、間質性肺疾患などもはや Oncology (腫瘍学) や抗がん剤の薬理学を知っているだけではマネジメントできない様々な症状を患者は経験し得るのである。これからの時代はさらに多くの分子標的治療薬が承認されることが予想されることから、Oncology を専門とした薬剤師に求められる薬学的知識もきわめて多角的かつ広範囲に渡るものと思われる。がん専門薬剤師制度が誕生し、外来

化学療法 of 普及、薬剤師外来、薬薬連携、共同薬物治療管理 (CDTM)、そしてがん患者指導管理料の算定と時代の流れとともに薬剤師に求められる役割も変化してきたが、ここでもう一度、薬剤師の役割の本質を考えてみる必要がある。薬剤師の役割とは、医師とも看護師とも異なる薬学的視点をもって、個々の患者に最適な薬物治療を提供する役割を担うことに他ならない。求められる薬学的視点とは、すなわち個々の患者において最適な薬剤を選択し、最適な投与方法・投与量・投与間隔などの投与計画をたて、薬物の有効性を



サンフランシスコ市街地

いかに最大とし、副作用をいかに少なくするかなどの情報を収集して体系化・理論化方法を探求する視点のことである。臨床研究はあくまでもこの本質を切り開くための手段であり、真の目的 (true endpoint) ではない。様々な情報が行きかう中、いつまでも本質を忘れずに今後もこの世界の大舞台へ挑戦するチャレンジャーとして様々なことに取り組んでいきたいと思う。

## 「日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2014」に参加して

大阪医療センター 藤田 晃介



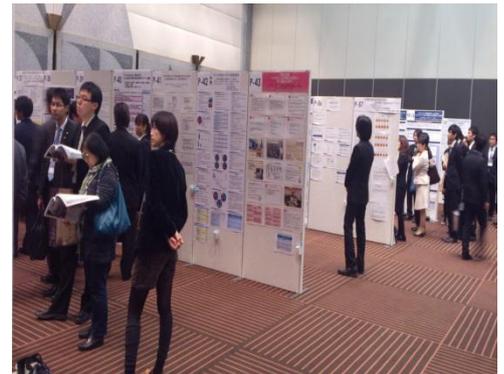
〈学会会場 幕張メッセ入口〉

3月21日、22日に千葉の幕張で開催された「臨床腫瘍薬学会」にポスター発表の演者として参加しました。

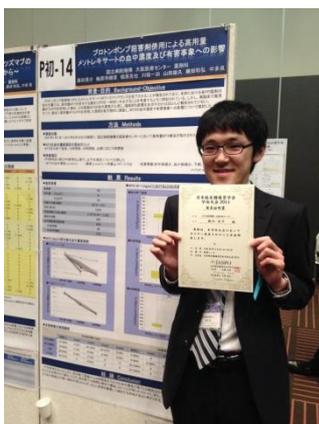
社会人、薬剤師として働きだして2年が過ぎようとしている中、勉強会や他の学会に参加しながら、まだまだ知識も経験も増やしていかなければならないと考えているときに、先輩薬剤師に声をかけて頂いたことが、学会での発表に挑戦しようと思ったきっかけでした。

発表の前日からとても緊張し、何度も練習しました。練習のときのように流暢な発表は出来ませんでした。私のつたない発表にも、多くの方が耳を傾けて下さり、様々な角度から質問やご指摘を頂くことが出来ました。今後の仕事や、患者様の症状を確認するときに、いろんな視点から物事を捉えなければならぬと考えさせられました。

また、他の先生方の発表や質疑応答からも学ぶことが多く、とても勉強になりました。



〈ポスター会場の様子〉



〈発表終了後

参加賞を持って〉

演者としては初めての学会参加でしたが、データの収集からポスターの作成まで、たくさんの先輩薬剤師がご指導して下さいのおかげで、何とか無事発表することができ、貴重な体験をさせて頂きました。今後も、日常業務の中で何か課題を決め、様々なことに挑戦しながら、薬剤師として成長していきたいと考えています。

このような機会を与えて下さった先生方、ご指導して下さい先生方にこの場を借りてお礼をさせて頂きたいと思います。

## 「第 35 回 日本病院薬剤師会近畿学術大会」に参加して

大阪南医療センター 田中 亮

平成 26 年 2 月 1 日（土）から 2 月 2 日（日）に京都府の国立京都国際会館で第 35 回日本病院薬剤師会近畿学術大会が開催されました。今回、私は参加およびポスター発表する機会を頂いたためご報告させていただきます。

私の発表演題は「当院における経口抗凝固薬エドキサバンの副作用調査」というタイトルでした。エドキサバンは下肢整形外科手術後の静脈血栓塞栓症予防を目的として 2011 年 4 月に承認された経口抗凝固薬であります。同様に静脈血栓予防を目的として使用されていたフォンダパリヌクスでは出血や Hb 低下といった副作用が数多く報告されていました。よって、エドキサバンにおいても同様の有害事象がないかどうか、発現頻度や発現しやすい患者の傾向等について調査を行いました。今回の調査ではまだまだ症例数も少なく、また、今後適応拡大の可能性もあるため、調査の継続も考えていきたいと思っております。

今回は私にとって初めてのポスター発表の機会となったのですが、ポスター発表中に他施設の方との意見交換も行うことができ、大変勉強になりました。また、他施設のポスターでは病棟業務についての発表が多く、薬剤師の病棟常駐によりインシデント・アクシデント件数が飛躍的に減少したといった内容の発表など、当院でも参考になるものもあり積極的に取り組んでいければと考えました。また、今回の学会会場では大学時代の友人にも多数会うことができ、まるで同窓会のような感じでした。お互いそれぞれの施設で日々努力して業務を行っている話を聞いて、私も一層頑張らなければと感じることができました。

学会参加により学ぶことが多く、とても実りある時間を過ごすことができました。今後も様々な学会に積極的に参加していきたいと思っております。



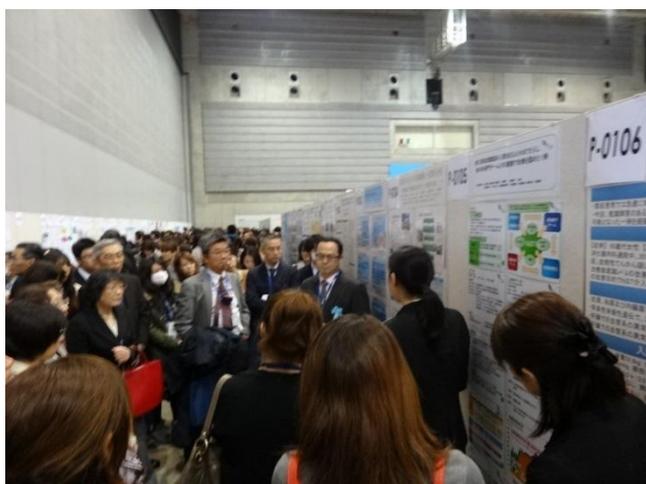
## 「第 29 回 日本静脈経腸栄養学会」に参加して

大阪南医療センター 西澤 有紀

平成 26 年 2 月 27 日（木）から 28 日（金）の二日間、パシフィコ横浜において第 29 回日本静脈経腸栄養学会が開催され、参加とともに発表の機会をいただいたので報告いたします。

今回の学会のテーマは「志学創新 研究で世界をリードしよう」であり、特にサーベイランス、脂質メディエーター、サルコペニアの 3 つのテーマに焦点を当てつつ、シンポジウム、パネルディスカッション、ワークショップ、特別講演などで多彩なテーマが取りあげられていました。

今回私は「食欲不振の原因として脳腫瘍及び神経性食思不振症の関与が考えられた一例」についてポスター発表をさせていただきました。内容は栄養サポートチームでの活動で経験した症例であり、器質的疾患の精査の重要性を実感したこと、また回診ごとの提案・検討内容とその経過についてです。わが国の臨床栄養分野の代表的な学会ということもあり、会場はたくさんの人で溢れていました。私は初めての学会発表ということもあり大変緊張しましたが、何度も指導・添削していただいた医師や薬剤師、栄養士の先生方に支えられ、無事発表することができました。発表時に座長から質問や指摘していただいたことも大変勉強になりました。



私が今学会で聴講したワークショップの中で特に印象に残ったのは、「化学療法と栄養管理」についてです。癌化学療法施行時は味覚障害や食欲不振などから栄養状態の低下がおこり、QOL や治療意欲の低下、治療の選択肢の制限につながります。そこで、治療の強度を上げるために、成分栄養剤や静脈栄養などを用い栄養学的介入を行う様々な研究がされていました。味覚障害の

種類が薬剤ごとに異なることや、成分栄養剤のアドヒアランスを上げるための工夫・副作用対策などが興味深く、日々の業務につなげていきたいと感じました。

学会に参加して、他施設での取り組みや研究発表を知ることができ、非常に多くの刺激

と新たな発見となりました。薬剤師としてまだまだ未熟な私ですが、質の高い医療に貢献できるよう、薬剤師としてチーム医療にどのように関わっていけるかを改めて考えることができました。今後も発表を目標に頑張っていきたいと思います。



<共同発表者とともに>

## 病院薬剤師になって

近畿中央胸部疾患センター 田川 知津子

今春4月より、新人薬剤師として近畿中央胸部疾患センターに採用になりました。つい先日の合格発表から早くも1か月が過ぎ、国家試験に合格できて良かったと喜び安堵していた自分を懐かしく思っております。

実際に現場で働かせて頂き感じたことですが、薬学部で6年間苦勞をしながら勉強をし、国家試験の合格を経て、薬剤師の免許を取得したとしてもそれで“安心”というわけにはいかないということです。

何が安心でないかということと大きく2点あります。

1つ目には、あらゆる面で私は薬剤師として、もとより社会人として未熟であることです。未だに薬剤師だという自覚もしっかり持てないでいるような気がします。辞令交付の初日から緊張の連続であり、1日の業務が終わり家に帰るとすぐに寝てしまうほど疲れ果ててしまいます。今、私は内服と注射の計数調剤をしています。採用薬はおろか、薬のある場所も把握できていない為、業務にかなり時間がかかってしまいます。また、医薬品や病院のことなどに関する知識はかなり不十分で、問い合わせの電話があっても、まず何について聞かれているのかさえ把握できないような状態です。自分では処理できない場面に遭遇すると、先輩薬剤師の先生方に頼らざるを得ず、その度に“実務実習や国家試験の勉強である程度の薬に関する基礎的な知識は身につけているから大丈夫だろう”というあまい考えを持っていたと痛感します。さらには基本的な調剤や業務の流れを覚えることにも苦勞しており、何度も教えて頂きながらでないと仕事を進められないことが多くあります。

2つめには薬剤師の免許を持っているという責任感です。

日々の全ての業務には緊張が伴いますが、特に調剤は患者様の命に関わってきます。薬の取り揃えは誰でもできることかもしれません。しかし、薬剤師は処方箋を見て不備はないか、また、本当に患者様にとって適切な内容なのかを考えた上で、正しく間違いなく薬を取り揃えなければなりませんし、それを忙しい中で行わなければなりません。しかしながら、正しいお薬を患者様に届けなければならない、自分が調剤した薬を患者の体に入ると思うと薬剤師の仕事の責任の重さを感じます。

現在の私は未熟でかなり頼りなく毎日の業務を行うだけで精一杯で、患者様のことを考えながらの仕事がいまいち出来ていないように思います。また、まだ分からないことが多く学ぶことばかりですが、お忙しい中、わざわざ時間を割いて懇切丁寧に指導して下さる先輩薬剤師の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも日々色々なことを基礎からしっかり学び、吸収し、いち早く患者様への有効で安全な薬物治療を行うための一助となれるように、自ら努力し続け一生懸命頑張ります。

## 病院薬剤師になって

大阪南医療センター 藤原 佐知子

私は昨年8月から大阪南医療センターで病院薬剤師として勤務しています。勤務当初は、緊張と調剤内規・業務内容を習得し、早く調剤業務に慣れようという思いで調剤する日々を過ぎて来ました。

現在は、調剤業務、発注業務、定数配置薬の管理業務、患者支援センター業務（入院予定患者の支援）、病棟業務に携わらせていただいております。その中で、特に正確かつ迅速にさまざまな業務をする難しさを実感しています。私は調剤業務においては知識不足や注意力不足で調剤ミスをすること、技能の未熟さで調剤に時間がかかることがあります。また、病棟に上がり入院患者さんの持参薬確認・初回面談、薬剤管理指導などで患者さんや他職種のスタッフと直接接する機会が増えました。しかし、他職種のスタッフと上手くコミュニケーションを図れず適時的確な情報を提供することの難しさを実感しています。

病院薬剤師は、チーム医療の一員として他の医療スタッフと連携して患者さんの問題点を抽出し、処方提案や服薬計画、治療効果や副作用のモニタリング、コンプライアンスの確認、生活習慣改善の支援など医薬品の適正使用を推進するうえで重要な役割を担っています。病院薬剤師の多様な業務を限られた時間内に行っていくためには、それぞれのことを効率良く適切に行っていかななくてはなりません。ですが、今は諸先生方に助けて頂きながら目の前の業務を懸命にこなしている現状です。

薬剤師としての知識や経験の少なさ、技能の未熟さで至らない点が多々ありご迷惑をおかけしておりますが、薬剤師としての役割を果たせるよう諸先生方を目標に自己研鑽していきたいと思っています。そのためには幅広くさらに専門的な知識の習得を心がけ、研修会・学会などに積極的に参加していきたいと考えています。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

## 院内リフレッシュ研修会に参加して

南和歌山医療センター 藤本 亜弓

研修期間：平成26年4月26日（土）

研修場所：熊野古道

研修内容：熊野古道を語り部さんと共に、散策する

研修目的：新採用者が、全職種のスタッフと交流し人間関係が円滑に行え、院外で活動することで、気分転換を図り、職務に専念できる。

研修感想

今回の研修は、看護師、薬剤師、臨床検査師、理学療法士、作業療法士といった職種の違う人達との交流を盛んに行うこと、人との出会いの大切さについて学ぶことができました。

熊野古道を歩きながら、仕事の話以外の話をする事ができ、同期の方々と距離が縮まったように思います。また、引率して下さいました先生方ともお話することができ、貴重な経験ができました。今は、調剤業務に集中していますが、今後、病棟での業務を行う上で、患者様の医療を行うために、他職種の方々と協力して仕事を行っていくため、話したことがある先生や同期がいると、心強いと感じました。他職種の方々と患者様の情報を共有していくことは、インシデントを起こさないことや早期に患者様の異変に気付けることにも繋がるため、重要だと思います。これをよい機会に、今後も多くの方々とコミュニケーションを図っていきたいと思います。



また、今回の研修で、語り部さんがなぜガイドになったかということについて話して下さいました。語り部さんは、聴覚障害者の方と会う機会があり、その人を道案内したことがきっかけで、手話のできるガイドになることができたと話して下さいました。その話の中で、「人はどんなところで人生が変わるかわからず、人との出会いは自分の人生を大きく変えてくれることがある」と仰っていました。私も10年くらい前に、ある薬剤師の先生と出会い、今の私がいるのですごく共感して話を聞かせて頂きました。これから様々な場面で、多くの人と出会い、コミュニケーションをとることが出てくると思います。人との出会い、繋がりを大切にして、多くのよい刺激を受けて、自分自身を磨いて成長させていこうと思いました。

今回の研修を通じて得られたことを、日々の業務に生かしていくために、まず、笑顔ですれ違う人と挨拶をする。挨拶することで、見かけたことがあると感じてもらえれば、声をかけやすくなると思ったからです。また、人に話かけることだけでなく、人の話を聴く。一方通行にならないように、相手の言いたい事、伝えたいと思っている事を感じる力をつけていくことが重要だと思います。日々、実践していけるように、感じている気持ちを忘れないようにしたいと思います。

趣味のページ  
～南国の海に魅せられて～

姫路医療センター 金川 明裕

今回趣味のページの執筆を担当する姫路医療センターの金川明裕と申します。さて、早速私の趣味について紹介すると、フットサル・ダイビング・釣り・旅行など色々あるわけですが、今回はダイビングについて書きたいと思います。

僕がダイビングを始めるきっかけになったのは、仕事を始めて1年目の夏休みに訪れた石垣島です。特にあてもなく行ったわけですが、その海の美しさに完全に魅了されてしまいました。次の年の夏休みには再度石垣島を訪れて、ライセンスを取得しました。それからというもの、海を見ると潜りたい衝動に駆られています。海の中というと薄暗くて、どんな生き物がいるか解らないから



怖いというイメージがある方もいるかもしれませんが、一度潜るとクセになる事間違いなしです！！海の中でふと上を見てみると海面に降り注いだ光が何とも言えない光景を生み出しています。僕は海底で寝転んで、上を見上げるのが大好きです。自分の呼吸音以外ほとんど聞こえない本当に静かな空間で、光のグラデーションを眺めているといつまでも海の中に居る事ができれば良いのにと 생각합니다。

それ以外にも、海の中には色々な生物がいてその多様性に驚かされます。上に写真を載せているマンタはダイバーの憧れです。幸運にも僕はこれまで7匹遭遇出来ています。マンタは大きいものでは幅が8mにもなるそうです。一度遭遇するとその迫力に圧倒されるのは



です。この様な大きな生物も居るかと思えば、下に写真を載せているウミウシの様に数センチしかないような生物も居ます。一見気持ち悪いウミウシですが、意外と可愛くて、種類もかなり豊富なので、女性に人気みたいです。最近はダイビング本数も増えてきて、余裕が出てきたので、このウミウシを写真に納める事にも熱中しています。

実はダイバーには医療関係者が意外と多いんですよ。ダイビング経験のない方は是非今年の夏休

みにダイビングをしてみてください。

そろそろ僕の趣味の話は終わりにして、次回のバトンは大阪医療センターの坂倉広大先生に渡したいと思います。

## 編集後記

- ♪ 新年度が始まり 2 ヶ月が経ちましたが、皆様体調は崩されていませんか。異動や採用になられた先生方は施設に十分馴染まれたでしょうか。また、単身赴任・一人暮らしを満喫されている先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。
- ♪ 横浜ランドマークタワーを超える地上 300 メートルの超高層ビル、あべのハルカスが 3 月 7 日に全面開業しました。高さ 288 メートル地点に設置されている展望フロアからは西には明石海峡大橋や淡路島、南には関西空港などを望むことができるそうです。
- ♪ 韓国南西部・珍島(チンド)付近で旅客船セウォル号が転覆・沈没する事故が起きました。捜索、救助は難航しており、死者・行方不明者は 300 名を超えると言われていまず。この事故の報道の際に「危機管理能力」という言葉をよく耳にしますが・・・万に備えておくことの大切さを改めて考えさせられます。
- ♪ アメリカのオバマ大統領が 4 月に国賓として来日しました。アメリカ大統領の国賓としての来日はクリントン元大統領以来、18 年ぶりのことだそうです。安倍総理の寿司でのおもてなしに食べ終えた際に「人生で一番おいしい寿司だった」と言われたそうです。皆さんの人生で一番おいしかったものは何ですか？
- ♪ 消費税が 8%に増税されました。電車やバスの運賃、郵便料金なども改定され、今までの切手やはがきにプラスしないといけなくなりました。「便乗値上げ」についての相談も消費者庁に多く寄せられているようです。皆様もご注意ください。
- ♪ 新年度最初の会誌です。今月号では科長提言、薬剤科紹介、薬剤師会講演報告、学会報告、新採用の先生の研修参加記や抱負、趣味のページなど、充実した読み応えのある内容となっております。今月も最後までご熟読ください。

(A. N)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

|                            |                  |               |
|----------------------------|------------------|---------------|
| 近畿国立病院薬剤師会会誌               | 第三十八号            | 平成 26 年 5 月発行 |
| 発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局          | 大阪市中央区法円坂 2-1-14 |               |
| (独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内) |                  |               |
| 発行人 会長 山崎 邦夫 (大阪南医療)       |                  |               |
| 編集 広報担当理事 宮部 貴識 (大阪南医療)    |                  |               |
| 広報委員 本田 富得 (大阪南医療)         | 川端 一功 (大阪医療)     |               |
| 中西 彩子 (奈良医療)               | 朴井 三矢 (京都医療)     |               |
| 小西 大輔 (大阪医療)               | 岩槻 瑠美 (南和歌山医療)   |               |
| 奥田 直之 (大阪医療)               | 田中 絵理 (大阪南医療)    |               |